

東日本大震災から10年

あの日の経験を生かすには

東日本大震災から10年という節目。

あの日の経験を生かし続けるには、

私たちは、どうしたらよいでしょうか。

あの日を振り返り、私たちが今できることを

考えてみませんか。

塩竈市民の皆さまへ

大きな被害をもたらした東日本大震災の発災から10年が経過しようとする中、2月13日に福島県沖を震源とする大きな地震が起きました。市内でも、震度5強を観測し、火災や家屋の損傷などの被害がありました。

今回の地震により被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

災害はいつどこで起こるか分かりません。市民の皆さまにおかれましても、ご自身や大切な方の命を守るため、災害への備えを改めてご確認いただきますようお願いいたします。

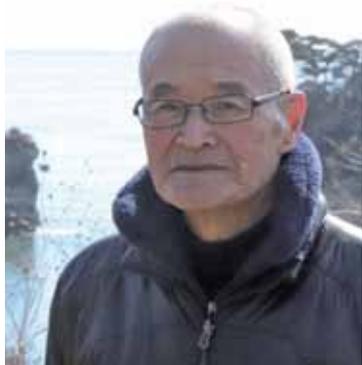
塩竈市長 佐藤 光樹

※2月13日に発生した地震による「り災証明書」「り災届出証明書」「災害ごみの受け付け」に関するお知らせは、16ページに掲載しています

あの日、 何が起きて、 何を思ったか

東日本大震災以降に市内で生まれた子どもたちは約2,990人、震災以降に転入した人は約19,490人になりました。あの日、市内で何が起き、どんなことを感じたのか知らない人も増えています。

あの日の経験を生かすには、これからどうしたらよいのでしょうか。市内で震災を経験した3人の方に話をお聞きしました。



浦戸桂島区長。桂島区長就任から6日目に震災発災。それから10年間区長を務めている。現在、浦戸振興協議会会長も兼務している。

命を救った地域の絆、
未来に残したい大切なもの

うつみ くめぞう
内海 桑蔵 さん

地震の直後、消防団員が集まり、高台にある旧浦戸二小に避難所をつくる準備に取りかかりました。その一方で、若者たちは、軽トラックで島内の低い土地にある住宅を回り、身体の不自由なお年寄りを荷台に乗せ、避難所に搬送しました。一刻を争う状況の中ではありませんでしたが、どの家に誰が住んでいて、身体の状況も把握していたので、迅速に行動することができたと聞いています。

避難所には全国からたくさんの支援物資が届き、自衛隊や団体、学生、歌手の方々など多くの方に支援活動をしていただきました。それに助けられ、心が癒されたことを覚えています。そのときの感謝の気持ちは今も忘れません。

あれから10年、いつ起こるか分からない自然災害に備えるため、機会があるたびに、これまでの経験を語っています。海辺で大きな地震が来たら、とにかく高い場所に避難することが大事です。それから、早め早めの決断と行動です。島民の命を救うために迅速に行動できたのも、地域コミュニティを大切にしてきたからこそだと思います。それが地域の誇りです。これからも大切にしていかなければなりません。



震災後に発行された「広報しおがま号外」。発災から15日後の3月25日に4ページで発行された。

東日本大震災塩竈市追悼式

東日本大震災により犠牲となられた市民の方々のご冥福をお祈りするため、追悼式を行います。

と き 3月11日(木)14時30分

と ころ 塩釜カスス体育館(今宮町9番1号)

● 新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、規模を縮小して行います。市民の皆さまの献花は、追悼献花所でお願ひします。

黙とうのご協力を

東日本大震災の発生から10年を迎えます。震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするため、午後2時46分から1分間の黙とうにご協力をお願いします。

追悼献花所

東日本大震災塩竈市追悼式同日、献花所を設けています。多くの方々の献花をお願いします。

と き 3月11日(木)13時～16時

と ころ 塩竈市東日本大震災メモリアルメント(海岸通196番4千賀の浦緑地)

● 時間内は、自由にどなたでも献花を行っていただけます

● 献花用の花は準備していますが、数に限りがあります

● 駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用ください

問 総務課総務係 ☎35555007



元毎日新聞社塩釜駐在記者。市内の復興取材し続ける。退職後は、NPOみなとしほがまのボランティアガイドとして活動している。

あの日の人とのつながりが 塩竈に寄り添い続ける理由

わたなべ
渡辺
ゆたか
豊さん

浦戸中学校の卒業式の取材を終え、市営汽船で帰る途中に、地震が起きました。船は、魚市場あたりまで来ていて、海面がボコボコと泡立っていたことを覚えています。船長の指示で、全員でマリゲート塩釜の3階まで避難しました。津波の第一波が引いたあと、市役所に走って向かい、避難者と一緒に寝泊まりして取材を続けました。

記者として、通信手段がないことが困りました。原稿は紙に手書きし、タクシーで写真データと一緒に運んでもらいました。肝心なときに携帯電話はつながらず、公衆電話も、翌日あたりにはつながらなくなっていました。普段は便利なスマートフォンなどは、いざというときは使えないということ、覚えておかななくてはなりません。

私は、新聞記者を退職した後、ボランティアガイドとして活動しています。震災のような体験をしたときの、人とのつながりは特別です。そのような人たちがいるところは、大事な場所になり、その場所とは関わっていたいと思います。そこで何か自分なりに、役に立つことがあったらやってみたいと思い、活動をしています。これからも、塩竈市に寄り添っていきたく思います。



市内在住の漫画家。主婦視点での被災経験を『生き残ってました。主婦まんが家のオタオタ震災体験記』(祥伝社)に綴っている。

自分なりの目線で 飾らずに描いて伝える

ひが
葉さん

地震が起きたのは、当時、中学3年生だった長女の卒業式を終え、帰宅した後でした。小学校にいた次女を迎えに行き、避難所の中学校で一夜を過ごしました。午前中までは卒業式の会場だった場所が避難所になっている光景に唖然とし、今までニュースで見えていた避難所に、まさか自分たちが…と思いました。翌朝、避難所で配られていた新聞を読み、はじめて大きい地震だったと分かりましたが、どこか現実感がなかったことを覚えています。その後は、水や食料の確保に追われ、毎日がいっぱいいっぱい、心に余裕はありませんでした。

テレビでは報道番組や同じコマーシャルが流れ続け、私は、何か暗い気持ちにならないようにできないかと感じました。そこで、目まぐるしく変化する震災後の毎日を書き残していたメモを基に、私自身が読みたいと思えるような4コマ漫画と文章で描き始めました。

震災から1年後に本が出版されました。本の出版にあたっては、葛藤や当時を思い出すことのつらさもありました。しかし、等身大で飾らずに、私自身の視点で描くことで、リアルな塩釜の被災経験を伝えることができたのではと思っています。

「kurashio(クラシオ)」掲載「月刊ひが葉のテーマ」は、こちらからご覧いただけます



市民安全課防災係 ☎ 355-6491



塩竈市津波防災センター 「7日間の記録」

東日本大震災発災後の1週間に焦点をあて、そのとき何が起き、人々が何を求め、状況はどのように変化していったのか、発生から7日間を中心に記録、展示しています。

もう二度と災害で大切なものを失わないために、今できることは何なのか。この展示を見ながら考えてみませんか。

ところ 港町一丁目4番1号

開館時間 9時～17時

休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌平日)、年末年始(12月29日～

1月3日)